

名取洋之助(1910-62)が企画・編集する「岩波写真文庫」は、1950年6月10日に5冊を同時刊行してスタートする。コンパクトな「写真百科」的シリーズだが、このような企画を受け入れるような土壌が、この頃までにできていたことを、当時の雑誌を見ることで解明する。

まず、前段として、戦前のグラフ雑誌や写真雑誌を概観する。

「総力戦」の時代には、印刷物によるプロパガンダは紙の爆弾と称され、回覧に適したパンフレットや、写真で感情に訴える大型のグラフ誌が重視された。36年に内閣情報部から創刊された『週報』は「国策のパンフレット」であり、38年創刊の『写真週報』は「国策のグラフ」とされ、「写真報国」という言葉で写真界に戦争協力を求めた。

アマチュア向けの写真雑誌の雄『アサヒカメラ』は、戦時統廃合で41年1月に他社の2誌を合併したが、42年4月に廃刊となっている。41年5月の「科学技術新体制確立要綱」閣議決定を受けた科学雑誌ブームが、文部大臣・橋田邦彦の提唱する「科学する心」で加速し、写真雑誌は取り残されていたのだ。『アサヒカメラ』が掲げていた4つのジャンル「報道写真」「家庭写真」「科学写真」「屋外写真」のうち、「家庭写真」はフィルムの供給減で撮れず、「屋外写真」は軍機保護法で撮影不可の場所が増え、国策に沿った「報道写真」と「科学写真」が主流となる。戦争末期まで残った写真雑誌の名が『報道写真』と『写真科学』であったことが、これを象徴する。

ブームの科学雑誌では、もっぱら通俗的科学技術が取り上げられた。朝日新聞社からは、欧米の軍用機中心の『航空朝日』(40年11月創刊)と、兵器と戦闘車両中心の『科学朝日』(41年11月創刊)が創刊された。用紙も優遇され、戦争末期にページ数を減少させつつ、最後まで持ちこたえる。『航空朝日』は45年11月で廃刊になるが、『科学朝日』はそのまま続刊し、戦後復興に役立つ科学啓蒙誌となる。

さて、敗戦から数か月、46年1月1日発行として創刊した雑誌は多く、数頁のグラビア口絵を持つ雑誌も現れる。中でも『ホープ』(実業之日本社)は『LIFE』の小型版のようなデザインで、グラビアも16頁と多く、内容も格調高い。しかし1年後には、グラビア頁の半分は2色オフセットの漫画になり、目次扉に人気画家・岩田専太郎らのイラストを掲載し、大衆向け娯楽雑誌を志向する。そんな頃に、日本の『LIFE』を目指して名取洋之助がスタートさせたグラフ誌が『週刊サンニュース』(1947年11月創刊)だが、1年半足らずで休刊。読者の関心はすでに硬派のグラフにはなく、高級グラフ誌として住み分けができるほど豊かにもなっていなかった。48年末の『週刊朝日』でさえ、本文20頁で漫画をカラーで2頁掲載するだけである。

日本出版協会の『書評』の記事や、『毎日グラフ』の「写真時評」(大宅壮一執筆)などから、48年末から49年頃の変動の様子が窺える。グラフ誌は新聞社系だけになるが、カメラブームが始まり、カメラ雑誌の創刊や復刊が一段落。新聞では49年末に夕刊が始まり、朝刊と夕刊の住み分けが話題になる。出版物の点数も増え、価値観の多様化の萌芽も見える。その一方、戦後復興のため「科学雑誌」も盛んで、文字で伝えられないものを絵や写真で「絵解き」する方式が定着していた。

このような土壌をふまえ、名取洋之助が得意とした報道写真と科学写真を中心に据え、「岩波写真文庫」はスタートする。岩波書店の1950年は、「岩波全書」の刊行再開や「岩波少年文庫」刊行開始など、新しい企画実現の年であった。

高度経済成長のきっかけとなる朝鮮戦争が、「岩波写真文庫」刊行開始直後の50年6月下旬に勃発する。経済成長は「岩波写真文庫」を予想以上の成功に導き、58年12月までの8年半に286点が刊行された。後発の他社企

画が、カラフルに、もしくは大判になっていくことから、この時期の経済成長が見てとれる。